

学生の自己評価から再考する実習指導

○佐々木昌代 濱田芳子
(宮崎女子短期大学)

I. はじめに

実習指導を点検・評価するとともに改善のポイントを得るために、アンケート調査による学生の自己評価を取り入れてきた。

保育所実習・幼稚園実習については、平成7年度より、実習終了直後にアンケート調査を実施して分析・検討をすすめ、その都度、得られた結果を次年度以降の実習指導に反映させてきた。

たとえば、学生は、実習ごとに目標を設定し、その目標を判断基準として学生なりに真摯な自己評価を行っていることを確認することができた。しかも、その評価は、実習園に対して実施したアンケート調査の結果や成績評価票に記載された評価と比較しても、概ね、妥当なものであることも検証することができた。同じく、実習をやり遂げた学生の思いや学びが、個々にみていくと過不足が認められたものの、総体としてみてみると期待していた以上の豊かな内容であることもわかった。

そこで、個々の不足を補うとともに、一人ひとりの思いや学びを相互に共有化して、より豊かに膨らませることを意図して、学生が互いに実習体験を発表・意見交流する場を、実習後指導として、設定するに至った。この実習体験発表・意見交流については、いずれ、明解な点検・評価を行わなければならないが、直接指導に当たった教員や学生の記録・感想からは、予想以上の好評を得た。

また、平成11年度からは、FD活動の一環として2年間の学生生活全般について学生の満足度を測るアンケート調査が実施されたのに倣って、実習についても、すべての実習を対象とするまとめのアンケート調査をはじめた。すると、それまでの個別の実習を対象とするアンケート調査からは得ることができなかった学生の目標設定や評価基準の実態を、思いがけず、見いだすことができた。

個別のアンケート調査では、回答された目標に少なからず重複する内容があったが、まとめのアンケート調査では、そのような重複が整理されて、個々の実習においてもっとも中心的な目標が比較的簡潔に回答されていた。その内容を集約してみると、学生が、実習ごとに独立した目標を設定しているのではなく、実習

体験の積み重ねを意識して段階的に目標を設定している様子がうかがえた。同様に、評価についても、まとめのアンケート調査では、実習体験の積み重ねを意識した段階的な相互評価が加味されていた。

このことは、実習指導担当者として大いに反省させられた。実習体験による学びの蓄積即ち学生の保育者としての成長ぶりを認識しつつ、明確な目標を持って実習にのぞむように求めながら、学生が2年間に体験する実習全般を見通して実習指導に当たるという視点が不十分であったことに気付かされた。

さらに、平成12年度には、これまでも必要性を認めながら見送ってきた、保育所を除く児童福祉施設で実施される保育実習（以下、保育所で実施される保育実習と区別して、施設実習と略称する）について、学生の自己評価アンケートによる点検・評価を行った。

その調査結果からは、保育者養成における施設実習の存在意味と重要性を、あらためて、認識することができた。

同時に、これまでの施設実習の実習前指導においては、学生のニーズに対して適時・適宜な情報が十分に提供されていなかったのではないかと、施設実習の存在意味に関わってその目的意識を学生が確かに持ちうるような働きかけが不足だったのではないかと、といったことなどが反省された。

言い換えると、実習前指導において、学生を受け身の状態に置き過ぎていたのではないかとということである。このような反省は、施設実習に限らず、保育所実習・幼稚園実習についても、振り返ってみるべきことであろう。

そこで、今回は、これらの気付きや反省をあらたな起点として、学生の自己評価から実習全般を見通した点検・評価を行う。

II. 目的・方法

平成11年度及び平成12年度に行われたすべての実習を対象とするまとめのアンケート調査を実施し、学生の自己評価を分析・検討することから、これまでの実習指導のあり方を再考するとともに、今後の実習指導のあり方を求める。

アンケート調査は、平成11年度については学年末

試験（卒業試験）最終日に、平成12年度については授業最終週のガイダンス・アワーにおいて、それぞれ実施された。

なお、平成12年度については、平成11年度の調査結果並びに平成12年度に実施された施設実習に関するアンケート調査の結果を踏まえ、目標設定とともに実習における思いや学びも調査内容とした。

<対象とした実習>

- | | | |
|---------------|-----|-------|
| ①保育所実習（保育実習Ⅰ） | 1年次 | 2月 |
| ②幼稚園実習（教育実習） | 2年次 | 6月 |
| ③施設実習（保育実習Ⅰ） | 2年次 | 夏季休業中 |
| ④保育所実習（保育実習Ⅱ） | 2年次 | 11月 |

* 2年次12月に施設実習（保育実習Ⅲ）が選択単位として設定されているが、今回は、必修単位に限定した。

Ⅲ. 結果

学生が、それぞれの実習に取り組むに当たって設定した目標について、平成11年度アンケート調査から集約すると以下のようなものである。

<目標設定 ①保育所実習（保育実習Ⅰ）>

保育所の一日の流れ、子どもたちの姿、保育者の仕事、子どもと保育者との関わり等々についてよく観察して、保育現場の実際を知る。

[例]・保育所が送っている一日を理解し、子どもとの接し方を先生方の様子から勉強する。

- ・保育所の流れを知り、たくさん子どもと関わり、保育者の仕事を知る。
- ・保育所の一日の流れを掴んだり、先生方の仕事を理解しながら、子どもたちと接する。

<目標設定 ②幼稚園実習（教育実習）>

保育所との違いを掴み、研究保育をやり遂げるための教材研究と、考えて準備した手遊びや読み聴かせなどの保育技術を子どもの前で試みることから子どもの発達段階（興味、関心、能力など）を具体的に把握するとともに、援助や指導の実際を学ぶ。

[例]・年齢別にどの段階までできるか、活動の援助や配慮はどのようなものがあるか学ぶ。

- ・幼稚園の一日の流れと保育所との違いを理解し、研究保育に力を入れる。

- ・幼稚園と保育所の違いを知り、実際に子どもの前に立って保育することを学ぶ。

<目標設定 ④保育所実習（保育実習Ⅱ）>

これまでの実習経験を生かして、一人前の保育者として、子どもの立場に立って、子ども一人ひとりに対応した保育の実践を目指して、自分のすべてを出し切る。

[例]・一人ひとりを見極め、一方的に展開せず、子どもの意見や提案を織りまぜる。

- ・保育のポイントを学びながら、前回の実習の反省をもとに、保育をやってみる。

- ・一人の保育者として認められるよう、責任を持ち、これまで学んできたことを精一杯出す。

①保育所実習（保育実習Ⅰ）でよく観察することから保育現場の実際を知り、②幼稚園実習（教育実習）で準備していった保育技術を試みることから子どもと援助・指導の実際を学び、③保育所実習（保育実習Ⅱ）で一人前の保育者として保育に挑戦するためにそれまでの学びを出し切る、といった具合に、ほとんどの学生は、学生なりに実習経験の積み重ねや学びの蓄積を意識して目標を設定している。その一方で、どの実習においても「子どもの名前を早く覚える」、「健康に気を付けて最後までやり通す」といった初歩的・基本的な目標設定に終始する学生も散見される。

※平成12年度についてのアンケート調査が実施できていないので、ここでは、平成11年度の保育所実習・幼稚園実習についての目標分析の結果のみを示した。

Ⅳ. 考察・まとめ

実習指導は、実習ごとに独立してなされるべきではなく、免許・資格取得のために履修される実習全般を見通して計画・実施されなければならない。当然、その見通しには施設実習も含まれる。施設実習は、実習手続きや実習形態が保育所実習・幼稚園実習と異なっているために、別個に取り扱われがちであるが、実際には、保育者養成において、保育対象である子ども（施設実習の場合は入所児・入所者）理解をすすめるために欠かすことのできない貴重な実習である。あらためてこれらのことを再考させてくれた実習全般に関する学生の自己評価の分析・検討結果を報告する。